sequences. Zool. Sci., 31: 321–329.
Kim, I.-S. and J.-Y. Park. 2002. Freshwater fishes of Korea. Kyo-Hak Publishing Co., Seoul. 465 pp.
Kimura, S. and Y. Nagata, 1992. Scientific name of Nippon-baratanago, a Japanese bitterling of the genus *Rhodeus*. Japan. J. Ichthyol.. 38: 425–429.
Miao, C.-P. 1934. Notes on the fresh-water fishes of the southern part of Kiangsu I. Chinkiang. Contrib. Biol. Lab. Sci. Soc. China (Zool. Ser.), 10: 111–244.
Miyake, T., J. Nakajima, N. Onikura, S. Ikemoto, K. Iguchi, A. Komaru and K. Kawamura. 2011. The genetic status of two subspecies of *Rhodeus atremius*, an endangered bitterling in Japan. Conserv. Genet., 12: 383–400.
森　為三．1935．朝鮮産タナゴ類 Rhodeina に就て．動物学雑誌，47: 559–574.
中坊徹次（編）．2013．日本産魚類検索全種の同定，第三版．東海大学出版会，秦野．2530 pp.
Nichols, J. T. 1929. Some Chinese freshwater fishes. Amer. Mus. Nov., 377: 1–11.
Okazaki, M., K. Naruse, A. Shima and R. Arai. 2001. Phylogenetic relationships of bitterlings based on mitochondrial 12S ribosomal DNA sequences. J. Fish Biol., 58: 89–106.
Regan, C. T. 1908. Description of new freshwater fishes from China and Japan. Ann. Mag. Nat. Hist. Ser. 8, 1: 149–153.
斉藤憲治・内山りゅう．2015．くらべてわかる淡水魚．山と渓谷社，東京．128 pp.
瀬能　宏．2013．ポプラディア大図鑑　WONDA 魚．ポプラ社，東京．223 pp.

（渡辺勝敏 Katsutoshi Watanabe：〒 606–8502　京都市左京区北白川追分町　京都大学大学院理学研究科　e-mail: watanak@terra.zool.kyoto-u.ac.jp；森　誠一 Seiichi Mori：〒 503–8550　大垣市北方町 5–50　岐阜経済大学地域連携推進センター　e-mail: smori@gifu-keizai.ac.jp）

書評・Book Review

魚類学雑誌 62(1):72–73
2015 年 4 月 25 日発行

SHARKS—The Animal Answer Guide—.　— G. Helfman and G. H. Burgess. 2014. Johns Hopkins University Press. Baltimore, Maryland. 249 pp. ISBN 978-1-4214-1308-2. 26.95 U.S. dollars.

サメ類に関する書籍や図鑑は数多く出版されており，これまでに多くの読者を魅了してきた．著者は，Springer and Gold によって 1989 年に出版され，仲谷によって 1992 年に「サメ・ウォッチング」というタイトルで日本語に翻訳された「Sharks in Question」の中にある言葉，「You can be certain that many more books about sharks will be written as new information increases our understanding; quite possibly, the future authors are among our readers」に強く感銘を受けているようである．たしかに，「Sharks in Question」は当時得られていたサメ類の情報を読者に分かりやすく紹介し，サメに関する知識を獲得するための良い入門書のような存在であったことは間違いない．上述の言葉通り，本書ではその書籍の読者であった著者がさらに新しい情報を加味し，サメ類についての知識を提供してくれている .

本書は Johns Hopkins University Press が「The Animal Answer Guide」として出版する 16 あるシリーズの 1 つとしてサメに焦点を当てた書籍である.「SHARKS」というタイトルが採用されているが，内容にはサメ類だけでなくエイ類および少数ながら全頭類に関する記述も含まれており，軟骨魚類全般にわたる説明がなされている．また，本文はすべて，「How many kinds of sharks are there?」といった疑問に返答するスタイルで構成されており，146 題の問いかけが用意されている．著者はジョージア大学名誉教授の Gene Helfman 博士とフロリダ自然史博物館の George H. Burgess 博士である．Helfman 博士は軟骨魚類の研究だけでなく，魚類の保全，進化，生態など，幅広い分野で活躍されてきた研究者である．Burgess 博士は軟骨魚類の生態や分布に関する分野の専門家であり，世界的なサメ類による人的被害を調査報告する機関である International Shark Attack File を統括する責任者でもある．本書は，彼らがこれまでに携わってきた調査・研究，そして実際に軟骨魚類を扱う際に得た経験，これまでに報告された数多くの論文を集約した，一般の読者にも魚類研究者にも知識と興味を与える 1 冊になっていることは間違いない．

本書は全 12 章から構成されている．以下に各章の内容を簡単に紹介しておく．第 1 章は分類，生息域，進化，化石などの情報に加え，最大種や最小種はどのようなサメかといった基本的な情報が掲載されている．第 2 章はおもに機能形態についての紹介であり，軟骨魚類の有する感覚器官，呼吸器官，骨格，そして遊泳や生活に重要な機能についてなど，各章とよく関連する内容が多く，読み進めていくなかでも中心的な内容が記述されている章であろう．第 3 章はサメおよびエイ類の様々な体色の違いや変化について紹介されており，背腹で色調の異なるカウンターシェイディングといった基本的な解説から，種ごとに見られる特徴的な体色までの詳細な記述がなされている．第 4 章ではサメ類の社会性の有無や縄張りなど，行動に関して説明されている．第 5 章は生態に関する記述で，第 2 章の機能形態ともよく関連する内容となっており，ボリュームの多い章である．回遊に関する記述が豊富であり，様々な種の水平・鉛直回遊に関する内容をまとめて知ることができる．第 6 章は繁殖と発達について書かれており，軟骨魚類で知られている繁殖様式の違いといった教科書的な内容というよりは，単為生殖や成熟年齢，さらには妊娠期間や間隔などについて，特徴的な種を抜粋して解説されているためとても興味深い．また，成長の速度や寿命に関する情報など，これまでに報告のあった種を表にまとめて分かりやすく紹介している．第 7 章はエサと摂餌に関する内容で構成されており，ここでも第 2 章で記述された感覚器官や機能形態と密接にかかわる内容も登場する．以前の章のどこにそれに関する記述が紹介されていたかを忘れてしまって

も，その箇所を提示してくれているので振り返りやすい．第 8 章から 11 章はすべて人間とサメ類の関わりについて紹介されている．第 8 章ではサメは愛玩動物となるのかという説明に加え，アクアリストたちの間でどれほどの費用で取引されているのかなどの情報，そして野生のサメやエイ類はどこに行けば観察できるのかなど，かなり詳しく調べられている．第 9 章では人間の視点に立ったサメに対する問題が設定されており，International Shark Attack File からの情報も含まれている．反対に，第 10 章ではサメの視点から人間に対する問題が挙げられており，人間の活動により影響を受けているサメやエイ類の実情から保護を促す言及までがなされている．第 11 章では生物学的な観点からは遠ざかり，サメやエイ類をモチーフにした貨幣，映画，音楽や装飾品などといった人間の文化活動について紹介されている．最後の第 12 章はタイトルがユニークである．ここには「Sharkology」という造語が充てられている．サメ類を含めた軟骨魚類をさらに詳しく知るにはどういった手段があるのか，研究者になるにはどうしたらよいのか，どんな研究があるのかなどが解説されている．

先にも述べたが，本書は 146 題の設問からなり，それに答える形式でサメ類を中心に，軟骨魚類の解説がなされている．恐らく一般の読者が思いつく疑問のほとんどがこの中に含まれているであろう．そのため，興味ある箇所だけを選んで読むことも可能である．本書はこれから軟骨魚類について学ぼうとしている初学者，博物館や水族館の教育活動等に従事されている方に特にお薦めできる書籍である．また，有益な情報を提供してくれるウェブサイトや軟骨魚類の研究を行っている団体や組織の紹介も本書の最後に付録として掲載されているため，さらに知識を深めたい読者には参考になるであろう．

引用文献

仲谷一宏．1992．サメ・ウォッチング．平凡社，東京．273 pp.
Springer, V. G. and J. P. Gold. 1989. Sharks in Question: The Smithsonian Answer Book. Smithsonian Institution Press, Washington, DC. 188 pp.

（松本瑠偉　Rui Matsumoto：〒 905–0206　沖縄県国頭郡本部町字石川 888　一般財団法人沖縄美ら島財団水族館事業部魚類チーム　e-mail: r-matsumoto@okichura.jp）

魚類学雑誌 62(1):73–74
2015 年 4 月 25 日発行

河川中流域の魚類生態学．—片野　修（著）．2014．学報社，東京．215 pp．ISBN978-4-904079-12-6．2,000 円（税別）

「川」という言葉を聞いたときに，多くの人が思い浮かべるのは澄んだ水が穏やかに流れる中流域ではないだろうか．あるいは，単に「川」というだけでは大都市を流れる下流域のイメージが浮かぶ人も多いかもしれない．しかし，「清流」といえば間違いなく中流域だろう．日本三大清流というと，四万十川，長良川，柿田川ということになっているが，小河川ながら湧水による水の美しさで名を馳せる柿田川を別とすれば，四万十川や長良川は中流域の景観が流程の多くを占めている．四万十川と長良川は，それぞれ河川延長が 196 km と 166 km の大きな河川だが，川沿いの道路を車で旅すれば，緩やかに蛇行しながら瀬と淵を繰り返す典型的な中流域の景観が長い距離にわたって続いていることを体感できる．もちろん川ごとに個性があり，川の両岸に山が迫った四万十川と，川の両岸に河岸段丘が発達することで比較的開けた長良川では，その印象は大きく異なるが，どちらの川も人々が親しみやすく，アユなどの豊富な河川中流域が流程の多くを占めていることに変わりはない．

さて，前置きが長くなった．淡水魚の生態研究において，河川中流域というのは古くから注目されてきた場所である．山間地での渓流魚の研究も盛んに行われてきたが，中流域は周囲に人里が広がることでアクセスしやすく，アユに代表される水産資源が豊富であるとともに，ほどほどの種数の魚類が相互に関係を持ちながら暮らしており，水は深すぎず，透明度もあり，生息する魚類を捕獲したり観察したりするのが容易という理想的な条件がそろっている．実際に現場で研究している生態学者に言わせれば，そんな簡単なものじゃない，と怒られそうだが，そもそも濁って見えない上に広大過ぎて全容がつかめない下流域や，膨大な生物種数のサンゴ礁に比べれば，アプローチしやすいのは間違いない．実際，1950 年代に京都大学の宮地伝三郎らによるアユやオイカワ，カワムツなどの中流域の魚類の生態研究が発展し，「アユのなわばり」「アユの侵入によるオイカワとカワムツの生息場所の変化」など，高校生物の教科書に長年にわたって掲載されるような研究成果が得られている．その後，河川中流域の魚類の生態研究は，やや下火になったものの，近年は保全のための研究が盛んに行われている．この本は，こうした河川中流域の魚類の研究史を概観した上で，著者の片野氏が長年取り組んできた河川の群集構造と，その群集を構成する魚たちの個性についての研究が紹介されている．

冒頭の第 1 章は，河川中流域の研究の前提となる河川形態の定義と，これまでの研究史の概要である．魚類学会に所属しているような 30 代，40 代以上の年齢の研究者は，幼い頃から魚図鑑などを擦り切れるまで読み倒したものと思うが，その頃の淡水魚図鑑には，必ずといってよいほど可児藤吉の定義した河川形態が図示されていた．そこには，一蛇行区間に複数の早瀬と淵が連続する上流域の河川形態 Aa，一蛇行区間に早瀬と淵が一セット形成される中流域の河川形態 Bb，そして水面からは瀬淵が判別できない下流域の河川形態 Bc が図示されており，河川の上流・中流・下流のイメージとして刷り込まれている．しかし，海外ではそうした定義は一般的ではなく，日本国内であっても河川工学などの土木系分野との共通言語にはなっていない．しかし，日本の河川の景観を簡易的に分類するには今でも有用であろう．本書において行われるように，あらためてその定義を振り返り，長所短所を理解しておくことは重要である．

第 2 章は河川中流域における魚類群集の構造の基本と，近年主流となってきた一般化線形モデルによる解析のモデルケースの紹介である．解析方法などをあまり詳しく紹介するわけではなく，やや表面的な紹介に終わっているのが残念だが，興味のある読者は引用文献から原著をたどってみると良いだろう．

第 3 章から第 7 章は，本書の主要な内容の一つとなる，河川中流域における魚類の相互作用についてである．本書では特にアユに注目しているが，日本の河川においてアユの影響は極めて大きく，藻類の効率的な摂餌による水生昆虫などへの影響，縄張り行動による同種・他種への干渉などを通じて群集に大きな影響を与える重要な要素である．内水面における水産有用魚種でもあり，河川生態学においても水産学においても研究が進められてきたが，本書は河川生態系の中でのアユの役割につい

て非常に分かりやすく，端的に説明がなされている．宮地伝三郎の「アユの話」から始まるアユの生態学，縄張りなどについての研究を現代的視点で再評価した部分は必読である．アユと水生昆虫や他魚種との相互作用についても，片野氏自身によるさまざまな実験的検証がおこなわれているが，その多大で緻密な成果を体系立てて説明されることで，河川内の群集の構造が非常に具体的にイメージできる．河川の魚類について研究する上で必須の知識であり，市民や子供を対象とした河川環境学習の場でも，こうした知識があるか無いかで，その内容のクオリティが全く違ってくるだろう．

第 8 章は淡水魚の繁殖様式についての紹介であるが，具体的な事例として挙げられるカワムツの繁殖行動は，個々の個体の行動の違いを浮き上がらせ，第 9 章の「個性」の話へと続いていく．第 9 章で紹介される「個性の生態学」は片野氏が長年取り組んできたテーマであり，それぞれの個体の持つ多様な「個性」が群集の構造へとつながることを明らかにしようという試みである．日本国内では魚類の個性についての研究は一般的ではないが，それゆえに今後の新発見の源泉となる分野かも知れない．

最後の第 10 章と第 11 章は，保全についての研究事例紹介と河川における水産業についての展望である．どちらも河川の恵みを未来に残していくための重要な分野だが，単純な問題ではなく，まだまだまとめられるものではない．しかし，保全については，河川環境を復元するための研究の重要性が，近年の優れた事例を使って紹介されており，同様の取り組みが進むことが望まれる．

本書は全体的に平易な文章でまとめられており，研究の中でのさまざまな体験などを語るコラムも興味深い．数式などを省略することで，学生や一般の方にも読みやすくなるように配慮されているが，引用文献が明記されているので，興味を持った読者は原著論文にあたって知識を深めることもできる．冒頭で述べたように，日本人にとって最も身近で親しみやすい河川あるいは清流とは，すなわち河川中流域である．本書は「清流の生態学」の入門書でもあり，淡水魚に興味のある方や，河川環境学習に関わる人に広く読んでもらいたい本である．

（向井貴彦　Takahiko Mukai：〒 501–1193　岐阜市柳戸 1–1　岐阜大学地域科学部　e-mail: tmukai@gifu-u.ac.jp）

魚類学雑誌 62(1):74–75
2015 年 4 月 25 日発行

毒魚の自然史－毒の謎を追う． －松浦啓一・長島裕二（編著）．2015．北海道大学出版会，札幌市．312 pp. ISBN 978-4-8329-8221-5．3,000 円（税別）．

本学会会員諸氏には，新聞等で魚介類による食中毒や，海水浴やダイビングなどで毒魚に刺される被害等のニュースが目にとまる方は多いであろう．また，毒をもつソウシハギやヒョウモンダコが近海で見つかって関係機関が注意を呼びかけるということや，これらの生物が暖海性であることから温暖化との関係が取りざたされるということも起こっている．本書に挙げられている毒魚が保有する生物毒のほとんどは，人間が死に至るような猛毒である．これらのことから，本書刊行の目的の一つは，読者が毒魚を正確に見分けることが出来るようになることにある．また，毒は人体に害を及ぼす一方で薬理作用をもつ場合もあり，自然科学界や医学・保険衛生学で重要な研究分野を占めているが，このような研究の重要性を挙げるまでもなく，「毒」というものがそもそも人の興味を引くもののように思われる．毒および毒をもつ生き物に対する怖いもの見たさのような心理が働くのであろうか，テレビ番組や雑誌などで「危険な生き物（絶滅危惧という意味ではない）」とか「最強毒生物ランキング」のようなコピーで本書にあるような魚類や生物が挙げられることは少なくない．本書刊行の目的には，このような毒魚に興味をもった読者に対して「毒」に関する歴史と最新の知見を紹介し，理解を深めてもらうこともあるようだ．

本書は毒（poison）をもつ魚を，フグ毒などの毒（toxin）をもつ魚類と，エイなどのように棘や鰭に刺毒（venom）をもつ魚とに大別し，前者に対して 3 部，後者に対して 1 部の総計 4 部の構成となっている．その構成を紐解いてみると，第 I 部は「フグ毒をもつ魚類」，第 II 部は「シガテラ毒をもつ魚類」，第 III 部は「パリトキシンもしくはパリトキシン様毒をもつ魚類」，第 IV 部は「棘に毒をもつ魚類」となっている．それぞれの部に章立てがあり，各々の毒をもつ魚類の分類と生態，毒の研究史と最近の知見，および症例や執筆者による研究談までが網羅されている．4 部のそれぞれに関連はあるが，読者が興味をもった部や章から読んでもよいようにある程度の独立性をもたせた構成になっている．内容については後述するが，それぞれの部・章の項目について造詣の深い編著者を含む 9 名の科学者による執筆で，本書のタイトル通り「自然史」にふさわしい構成と内容になっている．また，毒をもつ魚類および水生生物の豊富な写真がついており，事典のように生物種名と事項の索引が別々に設けられ，さらに専門用語で説明が必要と思われる内容には BOX という解説欄が文中に付されるなど，読者向けに細かい配慮がなされている．

第 I 部は「フグ毒をもつ魚類」であり，「フグ類の分類」と「フグ毒」の 2 つの章からなる本書中でもっともページ数の多いところである．「フグ類の分類」の章では，いわゆるフグとして認知されているフグ科魚類に加えて，カワハギなどを含むフグ類の分類と系統，分布や生態などを最新の知見を交えて丁寧にかつ分かりやすく纏められている．「フグ毒」の章では，フグ毒の単離と構造決定の歴史から，その性状と作用，フグ類を含む水生生物における分布と蓄積部位の詳細や，フグ毒のもつ生理・生態学的な役割，フグ毒による食中毒の事例などが述べられている．フグ毒の毒力測定に未だに定性的な要素の強いマウスを用いたアッセイ系が広く使用されている理由は，テトロドトキシンにも様々な異性体があり，なおかつナトリウムチャネルを阻害するテトロドトキシン以外の毒（サキシトキシン）がフグ類に混在するなど，複雑な理由によるものであると理解した．また，海底のミステリーサークルとして最近話題になった *Torquigener albomaculosus* の営巣・繁殖行動や，フグがフグ毒に対して示す行動，そしてフグ仔魚がフグ毒を皮膚にもつことで被食回避に役立てている直接的な観察といった興味深い最新の知見も紹介されていて，ボリュームに違わない読み応えのある内容になっている．

第 II 部は「シガテラ毒をもつ魚類」であり，「シガテラ毒をもつ魚の分類と生態」と「シガテラ毒」の 2 章から構成されている．「シガテラ毒をもつ魚の分類と生態」の章では，まず，シガテラ毒をもつ魚種が多く，それらに系統的な関係が見いだされないことが述べられている．そこで，シガテラ毒魚の関連を探

る試みがなされる．シガテラ毒魚は全種が熱帯の浅海性であり，その大半はサンゴ礁性魚類であること，そして食性は肉食か雑食であることが特徴で，サンゴ礁域のシガテラ毒を産生する付着性微細藻類が食物連鎖を通じて魚類に蓄積されるという経路が推測されている．「シガテラ毒」の章は，シガテラ中毒の事例から始まり，シガテラの原因物質であるシガトキシンの構造決定と異性体を含む地域特異性の研究に至る研究史が述べられている．シガトキシンは致死性の高い毒であるが，シガテラ毒をもつ魚が保有するシガトキシンの量はごく微量であるため，原因物質の特定に膨大な努力と分析機器の進歩とが相まってはじめて可能になったことがよく理解できる内容となっている．

第 III 部は「パリトキシンもしくはパリトキシン様毒をもつ魚類」であり，「パリトキシンもしくはパリトキシン様毒をもつ魚たちの分類と生態」の 1 章と，毒に焦点を当てた「パリトキシン」と「パリトキシン様毒」の 2 章から構成されている．1 章では，パリトキシンをもつ魚たちがニシン目，スズキ目そしてフグ目という系統的に離れた 3 グループに分類され，これらの多くが熱帯に分布しているという点ではシガテラ毒をもつ魚と類似している．ところが，パリトキシンをもつ魚類には温帯種もあれば淡水種もあり，食性も実に多岐に亘っており，毒化と魚類の系統や生態には関連が見られないことが示されている．「パリトキシン」の章では，パリトキシンによる食中毒が正確に特定されたケースがごく少ないことから紹介され，食中毒以外にも海岸でパリトキシンを含むエアロゾルを吸った観光客が集団中毒を起こした事例などが紹介される．続いて，パリトキシンが，魚類以外にも甲殻類やイソギンチャクの仲間などさまざまな海洋生物に分布していることが述べられ，パリトキシンの化学構造や性状の記載と，その起源が *Osteropsis* 属渦鞭毛藻であることが特定されるまでの研究史が紹介されている．ここまでの症例や研究史を読んでいると，まるでオカルト小説のような実話もあり，パリトキシンという毒の恐ろしさと不思議さが否応なしに伝わってくる．パリトキシン中毒が正確に断定できたケースは非常に少ないこともあり，次章はあえて「パリトキシン様」毒と断られ，アオブダイを中心とした様々な魚類の中毒事例が多数紹介されている．アオブダイの毒化の研究を通じて，*Ostreopsis* 属渦鞭毛藻が分布する海域では，その他の魚種も毒化する可能性が高いことが述べられている．この部では，BOX の項目に他章との重複（LDH の酵素活性とマウスアッセイの項）が見られたことが残念に思われた．

第 IV 部は「棘に毒をもつ魚類」であり，「刺毒魚の分類と生態」と「魚類刺毒の性状と化学構造」の 2 章から構成されている．「分類と生態」の章では，板鰓類から硬骨魚までの多岐に亘る分類群について，各々の分類と生態の最新の知見が紹介されている．中身は高度な内容も多く含まれているが，筆者自身の「刺毒魚」に刺された体験も含め，様々な興味深いエピソードが織り交ぜながら書かれており，面白く読み進められた．「魚類の刺毒」の章では，さまざまな刺毒魚の「刺毒」の化学的性状や構造が説明されている．刺毒をもつことで有名なゴンズイですら，皮膚毒と刺毒を分けて精製することが困難であることや，多くの刺毒は保存すると活性を失ってしまうことなどが，研究史とともに詳しく紹介されている．これまでの 3 部で紹介された毒とは異なり，刺毒は主にタンパク質で非常に不安定な構造をしていることに起因しているらしい．筆者の研究グループがオニダルマオコゼの刺毒成分を精製し，その構造を決定していく過程は，困難な壁に立ち向かいながら様々なアイデアと手法を組み合わせて少しずつ謎を解いていく研究の苦労と面白さが読み取れて強く印象に残った．

本書では，冒頭にも「フグはもちろんのこと，最近日本でも問題になっているシガテラやパリトキシンなどの毒をもつ魚類，さらに，エイやミノカサゴのように棘や鰭に毒をもつ刺毒魚について，有毒魚類の全容をやさしく解説する」とされていたが，内容を理解するためには魚類学や化学についてある程度の高度な知識が要求されるように思えた．2014 年までの最新の知見を網羅した 28 頁に亘る参考文献が，本書の内容の濃さと高度さを示している．もちろん，内容が高度過ぎて一般読者がついて行けないというようなことはないであろうが，むしろ，大学生レベルの生物毒に興味をもった人が理解を深めるための橋渡しとして，あるいは研究者や学生が研究を進めていくために読む総説として利用するのに最適の書であろう．

（阪倉良孝　Yoshitaka Sakakura：〒 852–8521　長崎市文教町 1–14　長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科　e-mail: sakakura@nagasaki-u.ac.jp）

図書紹介・New Publications

魚類学雑誌 62(1):75–75
2015 年 4 月 25 日発行

今西錦司ーそのアルピニズムと生態学．—石原　元（著）．2014．五曜書房，東京．247 pp. ISBN978-434-19826-7．1,800 円（税別）．今西錦司は三角点から下界を見下ろし，ぐわしと生物の世界を鷲掴みにする．しかしそのまま手を開いて掴んだものを確かめたりしない．そのうち，自然学というグローブまではめてしまい，手すら見えなくしてしまった．だから，仮説・検証型科学の薫陶を受けた現代の進化学者，生態学者にはすこぶる評判が悪い．されど今西，今さら何をと言うなかれ．愛読書はマルクス，レーニン，サルトル，フーコー，好きな映画監督はゴダールという，異端の魚類学者による，怪傑今西の脱構築の試み．それは，日本における現代の生態学に自らの脱構築をも迫っているようだ．

（酒井治己　Harumi Sakai：〒 759–6595　山口県下関市永田本町 2 丁目 7–1　水産大学校生物生産学科　e-mail: sakaih@fish-u.ac.jp）